

LIFFT journal

Feeling life. Thinking with flowers.

Sample

「私らしさ」

ISSUE 01

LIFFT

バラと呼んでいる花を

別の名前にしてみても

美しい香りはそのまま

What's in a name? That which we call a Rose,

By any other name would smell as sweet.

— ロミオとジュリエット



私らしさ

「どうしてあなたはロミオなの？」
かの有名なこのセリフに続くのは、身分の差のためにその恋が叶わぬものと知って、「名前を捨ててもあなたはあなた」と語るジュリエットのバラのたとえです。

バラから名前を取ってもそれだとわかるのが香りだとしたら、あなたの名前——あるいは、着ている服や、何をしているか、どんなところに住んでいるか——がなくなっても、これがあれば私だと言えるものってなんだろう。今号の「LIFT Journal」のテーマは「私らしさ」。

お届けしたバラは、静岡県菊川市にあるやぎバラ育種農園におすすみを選んでいただきました。ひとつの色の名前では表現しきれないニュアンスカラー、アイコンックな形、個性的な香りなどを持つさまざまなバラがブレンドされています。中には初めて出会うバラが入っていることもあるかもしれません。

珍しいバラが入っているのには理由があります。やぎバラ育種農園は国内でも数少ない育種を行っている生産者で、扱う花の9割がオリジナル品種なのです。育種というのは、いわゆる品種改良のこと。たくさんの種をまき、吟味して選んだ1種の苗を増やしていくことで新しい

品種をつくります。ひとつの品種ができあがるまでには数年もの月日と、約1万粒もの種を植える途方もない手間を経て、あなたの手まで届けられています。

自身の代になってから育種に力を入れるようになったという、2代目の八木勇人さん。並々ならぬ情熱は一般的なバラとは一味違うバラを作ることに向けられています。

「育種をする時は人の意見は聞かないようにして、まともな育種家なら捨合わない品種も拾っています。例えば、弱かったり成長が遅かったりしても、愛情を注げば個性のあるバラになることがあるんです」。

目指しているのは一輪でも絵になるバラ。アートピースのような主役級のバラを思う存分楽しんでください。

やぎバラ育種農園

静岡県菊川市

八木勇人さんが手掛ける昭和48年から続くバラ農園。3,000坪の土地で40種のバラを栽培し出荷している。仏語で「芸術のバラ」を意味する「Art Rose (アールローズ)」と総称したオリジナル品種には定評があり、ジャパンフラワーセレクションなどで受賞を重ねている。ウエディングから日常使いまで幅広く活躍し、その花姿が与える驚きや繊細さでファンからの支持も厚い。

Website: yagirosebreedingfarm.com



美しいバラを届ける ためのこだわり

バラがその美しさを保ったまま届くまでには、繊細な品質管理が行われています。ここでは、そのこだわりをご紹介します。

バラの芽は赤い色をしていて、この時点で香りはありません。それが育ち、苗になります。苗から花に育つまでの温度は夏は27度、冬は18度で保たれています。乾燥すると気孔が閉じてしまい、成長が止まる原因になる。一方で蒸れにも弱いため、湿度も慎重に管理されています。

出荷前の収穫のタイミングにもこだわりがあります。早すぎると花びらが開かず、遅すぎるとお届け前に咲き切ってしまうためです。摘んだバラは下処理をし、花びらが傷つかないように慎重に。梱包でも、蒸れないように箱に穴を開けたり、出荷中に動いて傷つかないように細心の注意を払います。こうしてなるべく傷付かず、最小限の人の手を介してあなたのもとにお届けしています。

こうして届いた直後のバラは、育てた八木さんが「少しずつ花が開いていくバラの醍醐味が味わえる」と言う「五分咲き」の状態。どんな風に花が開いていくのかじっくり眺めながら、このバラが辿ってきた道のりに思いをめぐらせてみてください。

いそいそ、ちゃきちゃき。
毎日の花しごとのすすめ

HOW TO CARE

01

バラが届いたら

トゲに気をつけながらバラを取り出し、葉やトゲは一旦そのまま、茎の先を斜めに切り、まずは水を張った花器に生けましょう。

02

道具をそろえる

ばさばさ 花鋏または、なるべく切れ味のよい鋏を
用意しましょう。お気に入りの花器を用意し、水を全体の3分の2まで張っておきます。

03

下準備のこと

ばさばさ 鋏でバラの先端を切り、水に浸かる部分の葉を一枚ずつ上方向に引っ張ってむしり取ります。葉が水に浸かって菌が繁殖しないようにするためです。

04

花器に生ける

花器選びに決まりはありませんが、花器とバラの高さが1:1くらいが黄金比。お好みの長さに切って花を組み合わせ花器に生けてみましょう。栄養剤はこの時に入れてください。

05

毎日のお世話

水はできるだけ毎日変えましょう。花器も清潔にすると花がより長持ちします。バラは茎を1センチほど斜めに切り落とし、水に触れる面積を大きくします。空調の風が直接当たるところには置かないようにしましょう。

06

傷んでしまったら

花に元気がなくなってきたら、茎を大胆に短くして葉も取ってしまうと元気が出ます。小さな瓶に生け変えたり、草木や突ものと合わせても可愛らしくなります。



香って、触って、考えて。 バラの愛で方、いろいろ

一輪で生けてみる

個性的な花を映かせるバラだから、一輪で生けても様になります。一輪選んで深く挿してみましょう。繊細な色合いのバラは、落ち着いた色の花器にも鮮やかな色の花器にもよく合います。

落ちた花びらを飾る

花びらが落ちてきたら、ガラスの小皿や小さな器に水を張って浮かべてみましょう。ふわふわと漂う姿は花とはまた違う美しさがあります。自分なりの花器との組み合わせを見つけるのも楽しみのひとつ。

自分だけの花器をさがしてみる

なにも高級な花瓶だけが花器ではありません。小ぶりのビール瓶や牛乳瓶、ジャムの瓶や徳利まで、どんなものでも花器になります。届いたブーケから花を抜き取って自分なりの花器に合わせてみましょう。

Happy Endが 待っている

自分と毎日を肯定して生きていく、
市川渚によるエッセイ。

vol. 01

＝
私らしきを作るもの
＝

う まくいかなかったことがあっても「人生に無駄なことなんてひとつもない」と思えるようになったのはいつからだろう。「無駄だった」「必要なかった」なんてネガティブに思ったとしても、その経験は自分にとって不要だ、という判断の基準を作ってくれる。失敗だ、なんて思う必要はない。ちょっと俯瞰して見つめてみると、必ず何か得られたものがあるはずなのだ。

子どもの頃に嫌々連れて行かれたキャンプ、毎晩インターネットに入り浸り寝不足だった中学時代、卒業しないで辞めたファッションスクール、強気の発言をしながら心は震えていたプレゼン、初

めての給料を注ぎ込んだ1着の服、1度しか会わなかったあの人……思い返せば、成功・失敗、良い・悪いにかかわらず、その時どう思って、実際にどう行動して、結果をどう判断したか、その積み重ねが今の私を作っているのだ。

10代、20代の頃は出来るだけ多くのことを、いち早く最短距離で経験して、何かを成し遂げなければ、と焦燥感に満ち満ちた毎日を送っていた。世の中にいる全ての人がライバルで負けられない……古い友人たちに“尖ったナイフ”と表現されるくらい、当時の私は常に戦闘モードにあった。同時に、漠然とした生きづらさみたいな違和感を

東京、ダーリンズ

大都市で、誰か想う人を巡る
ショートストーリー

Julien Levy

「ううん、完璧だよ。」 #01

「花は女の子のために作られたものなのよ。」

私はまだ小さな女の子だった頃、母は繰り返してこう言い聞かせた。男の子は花を扱うには残酷で、無神経なのだ。そして手のひらに乗せた小さな花びらを差し出した。私は不思議に思いすらした。ピロッドにも似た繊細な花びら。どうしてこんなにも儂いものを自然は創り出すことができるんだらう。それはほんのわずかな風が吹けば粉々に壊れてしまうようだった。数年前に、父が母の心を粉々に壊したように。

何年かが経って少し大人になった私はひとつ決めごとをした。それは、初めてのデートで男の子に花を一輪贈ること。10代の頃から今までずっと続けている。私のなかだけできめたこと。母にどうこう言われるものでもなければ、この社会がどう思うとも関係ない、ただの私らしさ。

やり方はこう。初めてのデートの待ち合わせ場所にバラを持っていく。だいたい白いバラで、時々気分で赤いバラを。フランスでは白いバラには「愛の始まり」、赤いバラには「欲望」という意味があるとか聞いたことがあったけれど、意味は好きなように決めていい。そして、彼に会うなり手にしたバラを差し出す。たいていの男の子は照れ笑いをする。中には手ぶらでできたことを申し訳なきそうにながら受け取る男の子もいる。そしてほとんどが、何か裏があるんじゃないかと訝しむ。けれど私にとっては、相手を知るためのとっておきの方法、それ以上でも以下でもなかった。

レストランのテーブルに花を置き忘れてしまった男の子がいた。バラの棘で怪我をした人もいた。短く切ったバラを胸ポケットからひょっこり覗かせて笑わせてくれた人

Sample

もいたし、ウェイターが寂しそうにしているからとバラをあげた人もいた。帰り際二人で飛び乗ったぎゅうぎゅうづめの電車で、あげたバラがドアに挟まれてしまったこともあった。私は首がもげてしまったバラを握り締めた彼の顔がたちまち悲しみに染まるなり、腫のふちが潤み、唇が小さく震えるのを見た。ほらねお母さん。みんながみんな残酷なわけじゃないんだよ。

母が間違っていたんだと証明できてうれしかった。花を愛でることができない男の子もいるけれど、できる人もいる。きつと、何をあげるかではなく、誰にあげるかが大切ということなんだ。

中には男のブライトを傷つけられたと怒って帰った人もいたけれどそんなことはどうでもよかった。私は、ただそうしたいから、独自に編み出した方法でバラをあげ続けた。ルールは破るためにあるんだし、誰だってどこか変わっているんだ。

たとえば。夏の日にエアコンを消して、肌が汗に包まれていくのを感じるのが好き。まったくわからない言語の映画を字幕なしで観るのが好き。夏海より冬の海が好き。布団に潜り込む前にカフェイン強めに淹れたコーヒーを飲むのが好き。冷蔵庫に貼る悪趣味なマグネットを集めるのが好き。おろしたての靴を雨の日に履いて、泥で汚れていくのを見るが好き。

そして、私は東京の反対側に住んでいる男の子に巡り合った。私は白いバラを手にも彼の住む街に向かった。けれど、電車で揺られて待ち合わせ場所に着く頃にはバラは

私らしさは、
むずかしくない



癖のパートナーなんかを撮ったもの。なぜならそれは誰かが撮ったことがあるもので、それに影響されたものだから。写真に勝手な「自分らしさ」を押しつけていたら撮れるものが少なくなっていました。

そういうことは一度忘れて好きなものを撮ろうとカメラを構えてみました。夕陽に透ける花、湯気が立っているご飯、コーヒーをいれるところ。ありきたりで、あたたかくて、なんて可愛いんだろう。なんでもないけれど愛おしさがこみあげる一枚を当たり前のハガキサイズにプリントして、そっとデスクに飾ってみました。

思っていた「私らしさ」なんてないのかもしれない。このジャーナルを編集しながらそんなことを考えました。その響き^{はう}が孕む、持って生まれたオリジナリティなんてないのかもしれないと。

本当は欲しくなかったものを手放した末に残るもの、お母さんの言いつけに反抗して見つけた自分のルール。そういうものを「私らしさ」に数えるならば、誰かに影響されたことや、毎日のなかで見つけたお気に入りでも十分なのではないかと。

仕事で写真も撮る私は、人に見せられない写真とというのがありました。夕焼け、靴を履いた足元、寝

Koh Degawa

編集・ライター・カメラマン。「LIFT」をきっかけにぐっとくる花畑探しの旅中。
Instagram, Twitter: @degawakoh

INFORMATION

ご意見・ご感想
お待ちしております

LIFFT journal では、みなさまのご意見・ご感想を大切にしております。
よりご満足いただけるよう、どんなことでも構いませんので
公式 SNS もしくは info@liff.jp までぜひお寄せください。

FOLLOW US



@liffflower

次号の内容や、お花の飾り方のアイデアなど
お届けしています

SHARE YOUR
"LIFE with FLOWER"

ぜひハッシュタグ「#liffjournal」をつけて、
みなさまの“私らしい”花のある暮らしを投稿してください。

Flower farm

Yagi Rose Breeding Farm

Editor in chief

Koh Degawa / freelance

Essayist

Nagisa Ichikawa / N&Co., THE GUILD

Art director

Chiharu Kodama / ium inc., THE GUILD

Author

Julien Levy / artist

Director

Tomoki Joko / BOTANIC Inc.

Distribution lead

Shota Fukuda / BOTANIC Inc.

Interviewer, Photographer

Saika Takano / BOTANIC Inc.

Customer experience

Natsumi Kato / BOTANIC Inc.

Florist

Hiroki Okuno / BOTANIC Inc.

Delivery

Yamato Transport

Farm to Vase

LIFFT

本誌記事／写真の無断転載・無断使用を禁じます。乱丁・落丁の際はBOTANIC Inc. (www.botanic.in) までご連絡ください。

発行元：株式会社 BOTANIC「LIFFT journal」事務局

LIFFT

liff.jp